

敷き、その上に肥料を混ぜた土を入れてタネまきしました。Cは肥料だけ混ぜた土にタネまきし、発芽して3枚目の葉が出たところに、土の表面を堆肥でおおいました。こちらは土9：堆肥1の割合です。肥料の量は4区とも10a当たりにして窒素・リン酸・カリそれぞれ15kgです。

写真は7月上旬にタネまきして、1ヶ月後の収穫時に根を見たものです。

● 堆肥で「根群形成・活性化基地」をつくる

4例の写真から、良質堆肥のあるところは、元気な根がふえてそこから深く広く張っていく「根群形成・活性化基地」であることがわかります。こうした効果を活かして、施用位置を選び、複数組み合わせるなど、上手に工夫したいものです。例えば、乾きやすく干害を受けやすい土や、栽培が長期にわたる作物では溝底施用で根を深く張らせる、硬くて排水の悪い土では表面施用で上から元気な根をつくって下へ向かわせるなどが考えられます。

C 堆肥を表層施用

堆肥下の土の表層で根がよく発生し、ここから底に向かって力強く伸びて全体の根量が多々。収穫は6株で398gと1位



D 化学肥料のみ

土の保水性・通気性が悪いため根が土の表面の枯れた葉の下などに浮き出してきたり、プランターの内壁のタテの溝（通気性がある）に沿って伸びたりしている。全体の根の量は少なく、とくに活力ある若い根が少ない。収穫は6株で308g

